



無敵ノ第一位

ム
ライニペン

スラスラ書いて
錆びず値の安い
國産逸品ノ

新生國策イリヂェウム
白金ペン付

書きよく
體裁優美
構造堅牢



クラウン万年筆

流線型



大坂・東京・小倉
株式會社 運井商店

山東運河略記

運河の歴史

「道はローマに通ず」と言はれるが、何時の時代に於ても又常に首府に向つて通じて居る。
今日知り得る運河の最も古いものは、兗州高徳の詩で有名な呉王扶差が、紀元前四六六年に揚子江と淮河を結び、邗溝を開いたのに始まるのであるが、それも、當時、中國の富と文化の中心であつた華北と、江南の吳都とを結ぶ爲のものであつた。漢代には山東の産物を首都長安に運ぶ爲に、黄河を運河化して居た。然るに三國東晉時代以後江南の經濟力は躍進を遂げ、遂に華北に代つて中國の大穀倉となつた爲、隋はかの大運河を設けて江南の米を長安に迎へる事となつた。
かうして唐代には七百萬石、宋代には八百萬石を毎年長安洛陽又は開封に運んだのである。嚴密に言へば、唐と宋では運河のコースも多少異なるが、いづれにしても山東省とは關係がない。

今堀誠二

て今は省略して置かう。
元代になつて北京が都となつた爲、北京江南の輸送路が考へられて来た。然し遼金の版圖内の運河は當時全く役に立たなかつたので、吳の邗溝即揚州運河によつて揚州から黄河に出（當時黄河は現在の淮水の上を流れて居た）、これを廻つて開封附近まで來、陸運により御河に達し、それを天津迄降る方法が最初とられた。然し餘り迂回となるので、至元十三年汶水を改修して濟州運河を造り、揚州運河によつて濟寧まで達し、少し陸運した後大清河を下つて利津に達し、これから海に浮んで天津に出る道が選ばれた。
然し利津が海港として無價値である事が判つた爲、同十七年山東半島を縦斷する膠萊運河が計畫され、江南から海路膠州に達し、運河を越えて萊州に現れ、渤海を横切つて天津に出る事になつた。運河工事には非常な努力が拂はれたが、この中央部がかなり高い上に運河用水に乏しく、結局失敗に終つ

て廿一年工事は全く放棄された。

所て利津が駄目だと判つて以來、濟州運河を更に北に延長して御河に達する事が考慮せられ、至元廿年には安山を経て東阿に達する運河が出来たのであるが、膠萊運河の失敗と共に一段と促進せられ、廿六年これを完成し、安山臨清間に對して會通河の名が與へられた。一方通州北京間の通惠河が廿九年完成し、御河の改修も終つたので、通惠河―御河―會通河―濟州河―揚州河―江南河によつて北京杭州間の水路連絡の大事業が完全に出来上つた。日本ではこれを大運河と呼び、外國人も此になつて居るが、中國では單に運河と稱するのが普通である。

この様に元は山東省の各地で運河を次々と掘り、遂に目的を達したのであるが、會通河は幅も狭く深さも淺かつたので、其後連年の改良にも拘らず、年に數十萬石を運び得る程度に過ぎず、從つて主要なる輸送は海運によつたのであつた。然るにかの元寇前後から朝鮮方面に現れて居た倭寇は次第に中國の海面に轉じ、殊にこの海上輸送は彼等の好陣となつた。即ち當時日本は戰國時代であつて、生産力勞働力の低下は食糧品の不足を招來して居たので、輸送米はその重要な目的物として

内容

第四卷 第十二號

鄒縣の古塔	表紙
山東省	1
海の幸	5
濟南	7
青島	9
芝罘	11
膠濟鐵道	13
津浦鐵道沿線	15
農家	17
農業	19
工業	21
産物	25
山東の歴史	27
山東の民具	31
よみもの	
山東運河略記	34
山東に因む劇	40
水托城	43
山東民謡覽書	47
東城記	49

狙はれたのであつた。

明代になつて、その傾向は彌々甚しく、永樂帝は北京遷都と共に運河政策をとるに決し、黄河の氾濫を埋つた會通河を中心として大改修を行ひ、九年これに成功し、十三年に海運は全く中止した。かうして明朝は毎年五百五十萬石の米を唯一本の運河によつて運んだが、清朝もこれを繼承して四百萬石を規定量とした。かくて長く中國經濟の大動脈として、運河は重い使命を負つて来たが、清末になつて上海天津間の汽船航路が發達したのと、太平天國亂によつて運河の損害も少くなかつた爲に、光緒廿七年遂に大運河に於ける政府の施設を放棄して政府米の輸送を停止した爲、以來運河も歴史的生命を一先づ閉ぢたのであつた。

運河の構造

山東省の地形を大観すれば、東部に深成岩のモナドノックで構成される山東山地帯があり、西部に黄河が運んだ土砂の作る黄土低地帯があると言へる。そしてその境界には、沖積層の低地が帯り細く續いて居る。泰山山脈に源を發した汶水は、西流してこの低地に出ると、そこで南北に分れて北行は黄河(元代の大清河今の舊黄河)に

注ぎ南行は淮河に連る。會通河は前者を改修し、更に延長して臨清に達し、此所で衛河(元代の御河)に會して居るのである。これに對し後者を利用して造られたのが濟州運河なのである。従つて山東の運河は衛河會通河濟州河に大別される。この他に前述の膠萊運河があるが、その現況がどうであるか私は調査して居ないので、今は省く事とする。衛河は南山西に發し、北に轉じて臨清に達すると、これから下流天津に到る迄が運河に改修されて居る。隋が高句麗遠征の爲造つた永濟渠もこれを利用して居り、宋元には御河、明清には南運河と通稱されて居るものが亦これに當るのである。省境近くを東北に走り、德縣を過ぎると間もなく直隸省に入つてしまふ。

川邊に立つて眺めると、これが元來自然河であつた事がよく判る。川幅は三十米位で、多少の蛇行を見せてうねうねとつづき、蛇行と言つても、直線ではないと言ふ程度である。眞赤な水が濁々と流れ、それも河北省の滄縣邊まではかなり早い。桃水と言つて、桃花の咲く頃解氷による増水を見てから、霜降節迄の間、水量が大であるが、以後は大體枯れる事黄河等と大差ない。打ち眺めた所、運河らしい特色

は、兩岸の大きな隄防のみである。隄上には柳が中々茂つて居り、且つ長く續いて居るが、これは隄根を固くする爲に植ゑたものであつて、大清水會典事例には、毎年河兵は百本、河夫は廿本植ゑる義務があり(官數)、この他官吏等が寄附して植ゑる事もあると言ふ(捐栽)。柳と、河中所々に生えて居る葦とが、水に映る所は可成り美しい。隄防上は道路となつて居り、引船の人が、それを歩き進む。従つて普通の道路はこれに平行して設けられ、商店等も見出される。船付場は、河中へ十米ばかり豪を突出し、又その内側に隄防を削つて、さゝやかなドック式の水城を設けて居るのがそれである。下の方は磚(煉瓦)で固め、上には切石を敷いて居る。附近の住民はこの水を飲料用として板が河中に突出してゐるのも平和な姿である。

東昌縣には積水閘が一つあつたと山東通志にあり、又汶水閘があつたと嘉慶東昌府志に見えるのであるが、共に一時的であつたらしく、例外と言へる。收水閘とは閘の傍に更に水口の斗門を有するものであつて、減水時にはこの斗門を開いて増水するのである。これに對し放水閘とは水の餘りに増大した時調節し得る放水口を備へた閘である。かうした施設の故に、各閘で區切られた間の運河の水量は自由に變更し得るのであり、従つて衛河の様に水が常に或方向に流れる事はあり得ない。所で濟州河の特色はこれに留まらない。地圖を開いて見れば直ちに氣付く事であるが、これに沿ひ東西に湖水が續いて居る。北から安山・馬路・南旺・蜀山・馬場・昭陽・獨山の諸湖が數へられる。この内安山馬場の兩湖は運河の東又は西にのみ位置するが、他はいづれもその東西に跨つて、存在して居る。例へば南旺東湖南旺西湖の如くに呼ばれて居る。即ち運河はその兩側の長隄によつて湖水を横斷して居るかの如き姿である。そして東の方の湖水に面して收水閘が、西の方の湖水に面して放水閘が設けられて居る。例を擧げれば蜀山湖では永定永安永春の三收水閘があり又金線利運の二放水閘がある

落と言つて毎年輸送船が通過し、河水も減じた頃にこの工に従つたのであつて、山東省でも全體で千五百十三人の定員であつたと言ふ。なほ河兵は運河の保護監視兵であり、淺夫は河夫の一種なのであるが、今は元よりかゝる人々は居らず、河は年々運河らしい色彩を失つて行くばかりである。

此に對して會通河は平地を掘つて作つた人爲的な運河である。尤も、安山から東阿迄は汶水北流を利用して居るが、その先は山東の平原を略南北に向つて一直線に掘られて居る。然もその間に大清河を始め徒駭河、馬頰河等を横切つて居るので、全く非自然的と言はねばならぬ。兩岸の隄防とか淺鋪の施設は衛河と同様であるが、更に河の横斷に備へて閘と閘とを造つて居るものが、會通河の特色と言へる。閘は極めて厚い隄であつて、自然河の流れを遮り又水勢を殺ぐ使命を有する。土で固められた隄の兩面に一丈ばかりの幅に柳その他の木や石を覆ひ、底部には護岸工事を施して居る。

清朝時代には閘夫を置いて専らこの工事に當らせてゐたのでありその數も百人に近かつた。閘夫は山東のみに置かれたものであり、閘は會通河のみに存するのであるから、以てその重要性

が察せられる。閘は牆とも言はれ、一種の水門である。元史河渠志に「閘を立て水を節すと記されてゐるから、元代以來設けられて居たのであらう。閘はその開閉により黄河等の暴水を防ぎ、又は運河水の減水を防ぎ、時に應じて此を排出するものである。その前後約五十米は石で疊まれて居るが、その面石の内側には海塩石が敷かれ、更にその内側を河磚(大きい煉瓦)で固め、灰土を使用し又鐵錠鐵鑄等を隨所に打つて、非常に頑丈にされて居る。閘の中央は河幅は十米位に縮められ、そこに相對して幅深さ共に三十種位の縱溝を穿ち、その溝にそつて同大の角材をかけ渡し、順次この角材を積む事によつて水を遮り得る仕掛となつて居る。従つてこの角材を積み又は除く事によつて自由に開閉されるのである。閘は二十餘も設けられ、水を順送りにしてそれによつて船を進める事も出来る。清朝時代には一閘毎に二十三人の従つて全山東では千三百餘人の閘夫が配置され、この啓閉や又その他種々な仕事に従事して居たのである。

宣統二年の聊城縣志によれば、光緒廿八年に河員が撤せられると、直ぐにこの地方では水は乾涸してしまつたと言ふが、今では全然運河として復立た

ぬ事は言ふ迄もなく、その痕さへ殆ど消滅せんとしつゝある。元來河川を横斷して運河を造る事は、從來の中國の技術では非常な無理であり、加ふるにこの地區では水の來源に乏しかつたから、かゝる地形的な弱點が克服されぬ以上廢滅も自然のなり行きであらう。安山以南即ち元代の濟州河は、大清水會典事例等に依れば魚臺以北を魚臺運河、鄆縣以北を鄆宿運河、以南を中河と呼び、又更に細別もして居るが、構造上からも又歴史上からも、これ等の間に差別はないのであるから、やはり一括して述べる事とする。前述の如くこれは汶水の南流を改修したものであるが、川幅も二十米位で、兩岸は極めて切立つて居て如何にも運河らしい。隄防も大體丈夫で石隄も少くない。閘は三百米間隔位に作られて居る。

元の魯時中の任城東記に所謂「地勢に高下があり、水流に緩急があり、阻礙の患が多かつた」ので數多く仕切る必要があつたと思はれるが、今ではその數も大體増加し、各縣志の記述を見ても山東通志等よりずつと増えて居る事が知られる。しかも單なる閘も少くないがその一半は收水閘(一名積水閘)及び放水閘(一名減水閘)であつた事がこの濟州河の特色である。尤も

が察せられる。閘は牆とも言はれ、一種の水門である。元史河渠志に「閘を立て水を節すと記されてゐるから、元代以來設けられて居たのであらう。閘はその開閉により黄河等の暴水を防ぎ、又は運河水の減水を防ぎ、時に應じて此を排出するものである。その前後約五十米は石で疊まれて居るが、その面石の内側には海塩石が敷かれ、更にその内側を河磚(大きい煉瓦)で固め、灰土を使用し又鐵錠鐵鑄等を隨所に打つて、非常に頑丈にされて居る。閘の中央は河幅は十米位に縮められ、そこに相對して幅深さ共に三十種位の縱溝を穿ち、その溝にそつて同大の角材をかけ渡し、順次この角材を積む事によつて水を遮り得る仕掛となつて居る。従つてこの角材を積み又は除く事によつて自由に開閉されるのである。閘は二十餘も設けられ、水を順送りにしてそれによつて船を進める事も出来る。清朝時代には一閘毎に二十三人の従つて全山東では千三百餘人の閘夫が配置され、この啓閉や又その他種々な仕事に従事して居たのである。

宣統二年の聊城縣志によれば、光緒廿八年に河員が撤せられると、直ぐにこの地方では水は乾涸してしまつたと言ふが、今では全然運河として復立た

結核はカリワで防

五百粒・百粒

と言ふ風である。換言すれば運河東側の湖は過剰水のはけ口を提供する。

この地方では、この儲水を水櫃と呼んでゐるが、櫃とは蓄へると言ふ意味であつて、水を蓄へて供給し又受容して蓄へる事を示すのである。この内昭陽馬場南旺安山の四湖は四大水櫃と稱せられ、特に大切であつた。

この儲水の水源には、汶洗深沔の諸水を始め、諸河川に負ふ所も多いが、更に湧泉に負ふ所も少くなかつた。濟南に遊んだ人は、釣突泉を訪れ、自然水が龍吐から出る様に猛烈に湧水するのを見て一應驚くのであるが、山東には水が偏在して居て、かゝる湧泉は中々多い。山東通志によれば、東平・汶上平陰・滋陽・鄒・曲阜・泗水・滕・嶧・寧陽・魚臺・濟寧・泰安・新泰・肥城・萊蕪・濰縣等の十七州縣にわたり四百二十の湧泉があつて、それが皆運河に注がれて居る。この湧泉は或意味に於て運河の生命を握つて居るとも言へるのであるから、明清時代はこの保護に特に力を注ぎ、奈州に管泉同知を、各泉に老人と泉夫を置いて、水源の確保に努めた事は、舊く李如圭の治水行臺記に見える。この泉夫等は又山東の濟州河に限り存するのであつて、湧泉の重要性は以て微すべきである。水に關

して拂はれた周到なる用意は、驚嘆に値する所である。

濟州河は自然河に依り乍らしかも人工の持を極めた施設を具備したのであるが、それは元より一日にして成つたものではない、元代から遂次作られ明代に最も努力され、清朝に整つたのである。従つて今に於ては元代の腫や明朝の隆が数多く残つて居る。然し光緒の放棄以後、水源が次第に奪はれ、それにつれて湖水が消滅し（南旺湖馬場湖）乃至は東湖又は西湖の一が陸地と化する等の現象が現れ、従つて收放水共にうまく行かぬ上、運河の淺深さへ意り勝つて居る。前清には淺鋪は無論此所にも存した。聞も空しく遺跡化しつゝある。従つて日々舟行の困難が甚しくなつて來て居る現狀である。

運河の社會

大運河は、言ふ迄もなく逞しい人間の意欲——中國人の獨特な生命力が、自然を征服して作りあげたものである。而も一度出來た後は、更に多くの人々が、運河によつて、生活し又殺され、楽しみ又苦しんだのであつた。この運河をめぐる喜劇劇の姿を、林語堂の北京好日 (Moment in Peking, by Lin Y. tang. 四季書房譯本) を

借りて、簡単にスケッチして見よう。

北京の豪商姚一家は、拳匪の亂（北清事變）をさけて杭州に行く事になり德州までは馬車で、以後は船で行く豫定であつた。その逃避行の途次、美しい少女木蘭は拳匪に擄はれ、德州郊外に隠される。この頃姚家の知人である高晉一家は、北京からずつと運河を下つて泰安に向つて居たが、木蘭の擄はれた事を知り、これを救ひ出す。彼等の、晉の字を大きく書いた赤旗を立てた大型の運河船は、東阿迄會通河を下つて、此所から陸路泰安に到つて居る。即ち完全に治安の失はれた時に於てさへも、官僚特高晉は、その所有の船で、全く安全な船旅を續け、更に知人の子を助ける餘裕さへ持つて居るのである。戰亂の内では、自己の安全の爲に逃亡中の彼等に、かゝる幸を與へる程、運河は「官僚の爲のもの」なのである。運河の設立及び維持が彼等の手によつて居る以上當然な現象でもあらう。かの隋煬帝に結びつけられてゐる豪華な運河による行樂も、言はゞ支配者階級の持ち得た特權である。清朝時代には運河は山東巡撫の直轄の下に、官僚の組織が作られ、總て彼等本位に運はれて居たのである。

所て運河の實際的な支配者は青帮で

あるとされて居る。青帮は今でこそ上海蘇州界と聯想して考へられるが、それは大運河放棄後の現象で、長い歴史に於ては大運河と共にあつたのであり、現在でも運河地帯の軍警界は、壓倒的にその支配下にある。

彼等自身の信する所によれば、青帮は雍正年間に漕運事業の全部を請負つて居た翁鏞潘の三氏が、運河地帯を横行了した土匪に對抗して舟行の安全を確保する爲に、配下の全運河關係者によつて組織した秘密結社であつて、その名稱も安清帮即清室を保んづる帮の意より出たものであつた。後清室滅亡後安の字が削られ、又土匪の團體たる紅帮に對して三水邊を取去つて單に青帮と記すに至つたと言ふが、然し實際上現在に於ても安清帮の字が普通に使はれて居る。帮は親分子分の關係で——従つて兄弟關係等も派生する——結ばれ、親分には絕對に服従する他、共通の憲法たる十大帮規を奉じて、帮の秩序を守り、禮教に順ひ、禍福を共にする事を死を以て誓つて居る。特殊な階級によつて、帮員と然らざるものを區別する。帮は極めて系統立つて編成され、例へば東昌府には六帮あつて軍船一五九艘船四六を有した（東昌府志）と言ふ調子で、全體を通じて組織

化されて居たのである。再び北京好日に立歸れば、木蘭救出の爲に曾氏は青帮の一味の一人をある酒屋に呼出して小頭目の所に案内させ、この小頭目に木蘭の行方を探索を命じたのである。木蘭は拳匪の手中にあつて青帮に捕はられて居たのではなかつたが、然し小頭目は三日目に所在をつきとめ、續いて百兩の身代金で曾氏に木蘭を渡して居る。林語堂はこの間の事を「彼（曾氏）は大運河の青帮には、けちな盗み

は勿論、誘拐についても完全な組織があることを知つてゐた。山東の土匪は山西の銀行家に負けないほど、立派な組織を持つてゐた。それで當時にあつては、銀行家は青帮の北京事務所から發行される護照に署名捺印して貰つておけば、銀を積んだ荷車を土匪の跳竊する山岳地方を経由して安全に送ることが出來た。途中の土匪はその署名を尊重した。政府とは異つて、同じ荷物に對して二度通行税を取ることは、匪

賊の道義ではなかつた。彼等の誓言はどこまでも誓言であつた。と説明して居る。

彼等遊民群は、

當時にあつては常に官僚の權威の前に屈し、官僚利益の保護者となつた。かの小頭目にしても、曾氏に囁かれて唯命に従ふばかりである。更に今日でも彼等青帮員は、曾ては將介石の、今や汪精衛の前衛隊として



活躍して居る事等、皆然りである。

彼等運河關係者の生活は、決して樂しいものではなかつた。官よりの強制匪賊との連絡及び闘争は元よりの事、舟行自體にも、北行に際しては濟州河を、南行に際しては會通河、衛河を通航する困難があつた。江南と異つて航走が殆ど不可能な山東地區では、ひき船に頼つたのである。現在ひき船をなすには、船の中央の兩舷に柱を立て、その頂上を真中で結び合せ、此所から綱をつけて岸に渡すのである。岸の人はこの綱を引るのであるが、その先は、人數に相當して分岐させてあるから、何人でも引ける。一方、柱の頂からは同時に逆の後方に向けても綱をつけて、此を船尾近くに倒した帆柱に結びつけて、以て中心部の柱の轉倒を防いで居る。引綱は通常進行方向に向つて右側の岸のみに渡されるので、船は岸に引寄せられるのを防ぐ爲に、船頭は上手に竿を使はねばならぬ。運河船は堰水が淺く、船幅が廣いから、抵抗は多いのであらうが、それでも船は中々早く進む。この仕事は見ても苦しうさうである。彼等がこれに耐へて、どれ程所得があつたかは元より不定と言ふ他なく、又彼等の中にも様々な階級があつたであらう。然しいづれにして

色 素晴らしい
文字 美しい

冠仁王

澤井商店 株式會社
大阪・東京・小倉